

監修の序

薬学教育六年制では、知識だけでなく技能や態度にも重点を置いた教育が行われている。残念ながら四年制の教科書には、この技能や態度をわかりやすく解説したものがほとんどなかった。しかし医学ではイラストを多用した書籍によって手技までもがわかりやすく解説されていた。それが「臨床研修イラストレイテッドシリーズ」(羊土社)であった。はじめて見たとき私は大変ショックを受け、医学と薬学の技能に対する歴史の差を感じた。それからまもなく羊土社から「ビジュアル薬剤師実務シリーズ 全4巻」発刊の話をいただき、いよいよ薬学も医学と同じような教育ができると確信した。そして六年制の学生が実務実習に行く前に、創刊することができた。

2008年10月に発刊された本シリーズは、多くの薬学部で教科書として採用いただくだけでなく、実務に就かれている薬局や病院の薬剤師にも購入していただいた。初版から5年が経過し、その間多数回にわたり増刷が行われたが、薬剤師を取り巻く環境の変化や制度の変化などにより、このたび「新ビジュアル薬剤師実務シリーズ」として生まれ変わることになった。本書のコンセプトであるビジュアルつまりイラストや写真を多用することは全く変えずに、新しい業務を加え、さらにコンパクトにまとめるという、相反する難題に立ち向かうことになった。現場での経験豊富な執筆陣は、この難題を多くの議論の末、乗り越えることができた。5年間の変化は著しく、東日本大震災における薬剤師の活動、登録販売者の出現、後発医薬品の促進、フィジカルアセスメントの普及など薬剤師にとって新たな対応を迫っている。もちろん薬剤師の任務は薬剤師法第一条に謳われているとおり、調剤、医薬品の供給その他薬事衛生をつかさどることによって、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものであることは不変であるが、その任務を遂行する方法は時代とともに変化する。本書では、最新の実務の遂行を取り入れるため、第一線で活躍する執筆者に加え、下巻〔技能〕においてはQRコードで動画の視聴も可能とした。これにより写真では難しかった微妙な動きやタイミングなどが理解できるものと思う。

新シリーズを発刊するにあたり、執筆者全員が旧シリーズの改訂ではなく新しいシリーズとして取り組んでいただいたことに深く感謝する。そして病院部門の監修者として新たに平井みどり先生に加わっていただけたことにより、さらに本書への信頼が増すものと確信する。

最後に羊土社編集部の秋本佳子様、庄子美紀様、林 理香様に心より感謝する。

2013年8月

監修者を代表して
上村直樹

編集の序

2006年4月に六年制薬学教育が開始された。六年制教育のめざすところは、「社会のニーズに応えられる薬剤師の育成」であった。裏を返せば、十分な薬剤師教育がなされてこなかったという指摘があった。

これを解決するために、これまでの知識伝達型学習一辺倒から参加型の学習が取り入れられ、6カ月の実務実習が義務づけられた。また、実務実習に行くことのできる学生であることを担保するものとして、CBTとOSCEという共用試験の実施が義務づけられた。

これらのカリキュラムに対応できる書籍の発刊をめざして、執筆陣は臨床の第一線で働きつつ、薬学教育の実績がある先生方をお願いした。

初版の発刊は、新カリキュラムの学生が、大学教員が経験したことのない1カ月の実務実習事前学習を始めるギリギリのタイミングの2008年10月であった。教科書でありながら、実務に関わる現場の写真を数多く掲載して解説する書籍スタイルは斬新であり、使いやすくと大学からも、現場の薬剤師からも好評をいただき、大変光栄に感じつつ、大きな責任も感じた。その間に、第1巻は9刷を発行するなどマイナーチェンジを繰り返してきたが、初版から5年間余りで薬剤師を取り巻く状況が変化した。わが国での超高齢社会において医療費が毎年1兆円ずつ自然増加するという背景の中、後発医薬品の使用が強力に推進されている。病院薬剤師には2012年4月の改訂で病棟薬剤業務実施加算が新設された。これは医師が処方決定する上流を薬剤師が担うという画期的な業務である。学生にとっては、2012年3月に六年制に沿った初めての国家試験が出題され、実務からの出題比率が大幅に上がり、問題解決能力を問われる設問も登場した。

これらの変化に対応すべく、改訂版の発刊に着手した。まず、初版は第1巻、第2巻を「薬局版」、第3巻、第4巻を「病院版」としたが、調剤実務や法規などの重複部分を統括して上下の2巻にブラッシュアップすることにした。学生にとっても、教員にとっても学びやすい構成となったと自負している。執筆内容としては新規に「フィジカルアセスメント」「後発医薬品」「一般名処方」「アンチドーピング」などの項を執筆していただいた。また、「病棟業務」を充実させ、「調剤の流れ」や「医薬品情報」など病院と薬局で異なる業務は分けて執筆していただいた。また、実務実習だけでなく、新傾向の国家試験の学習に役立つよう章末問題を新たに追加した。さらに、携帯端末の普及に合わせてQRコードを読み取ることで実技に関する動画が見られるという新しい試みも行った。

チーム医療において、薬剤師が主体的に薬物療法に参加するという、当たり前のことが当たり前になる時代が来ることに期待している。本書がその一助となれば幸いである。

2013年8月

編者を代表して
下平秀夫